

●文化講演会 12日(木)6、7限「^{らいさんよう}広島ゆかりの頼山陽」(演題)

見延典子(みのべのりこ)先生をお迎えして

- ・「9月ベネッセ・駿台マーク模試」の第4問は、奇しくも頼山陽の文章でした。記憶がありますか。
- ・『十八史略』の現代語訳と頼山陽の『日本政記』の二つの文章からの出題でした。
- ・唐の太宗の逸話(法を厳しくせず、民衆の生活をはかった政策が太平の世をもたらした)と、一方、日本での、厳罰主義の織田信長の政策が、最終的にはその恐怖政治によって臣下(明智光秀…大河ドラマ『麒麟がくる』主人公)の謀反を招いたという内容を読み比べていく出題でした。
- ・「解答解説」(211p)には、頼山陽について、以下のような紹介がありました。

頼山陽(1780~1832)は江戸時代末期の儒学者・文人。名は襄(のぼる)、字は子成。山陽は号である。

※「号」とは学者や文人が本名以外に用いる名のこと。安芸(広島)の人で、江戸に出て学び京都に居住した。詩文に優れ、『日本外史』などの著作は広く読まれるとともに、幕末の尊皇攘夷運動に大きな影響を与えた。

★さらに、以下のような注目に値する記述もありました。読んでいますか。(同じくp211)

センター試験では日本の漢詩文の出題は必ずしも多くなかったが、2017年の施行調査では日本の漢詩文が出題され、日本文学史における漢詩文の位置が問われており、共通テストでは積極的に出題されることが予想される。漢詩文が古くから日本人に受容され、多くの作品がつくられたことを覚えておこう。

●ちなみに2014年センター試験の評論文でも、「漢文脈と近代日本」が出題されています。「文武両道」の本来の意味がああ文章でわかりましたね。頼山陽の著作もそうですが、漢文(漢籍)は、現代の私たちが思っている以上に、日本人に影響を与えていることがわかります。この度、広島にゆかりがあり、幕末時のベストセラー作家でもあった頼山陽について、一緒にお話を伺う機会を得ました。貴重な時間をしっかりと充実させましょう。

●5日(木) 学年集会を振り返る。3人の話の内容の概略です。

①「ばか力」(いざというときのとてつもない大きな力)の出し方

・12年前、水泳部の顧問だったときのこと。メドレーリレーでのインターハイ出場がかかった中国大会決勝。インターハイ派遣標準記録まであと2秒。予選でも縮まらなかったその「2秒」が決勝で縮まり、見事、全国大会への出場を果たした。

・決勝レース前、レースのカギを握る2年生の選手は言った。「先輩、いろいろありがとうございました。オレやるから…。」この後輩の言葉は他の3人の3年生も奮い立たせた。最後の最後に記録が伸びた!!

・「ばか力」は突然出るものではない。次の3点が条件。

①信じてやっていくこと。②制約の中で一生懸命練習すること。③仲間と一緒にやること。〈チーム力〉も必要。

②今の頑張りで大丈夫か。「今のままで一切後悔しないか?」

・卒業生について。過去の日記を見返してみる。それぞれにいろいろな「物語」があった。

・ある一人の生徒。11月マークから本番まで100点伸ばす。本番前、「やりきった。後悔ない。」と語る。が、結果は残念なものに。進学先が決まったときの挨拶では「ただただ悔しい。」と泣いていた。…これが受験なのか。こういう終わり方もある。もう一度自分と向き合ってほしい。まだまだやれる!! 成績が伸びずしんどいかもしれない。が、このままがんばるしかない。くよくよしない。

③「姿勢をよくする」「甘えを捨てる」「時間を惜しめ」

・姿勢が気持ちを変える。服装、姿勢、言葉が大切。「形」が「こころ」(なかみ)に影響を与える。

・「メンタル弱い」という言葉がメンタルを弱くする。明るい顔で目線を上げる。明るい言葉で自分と友を励まそう。

・締め切りぎりぎりが目立つ。早く出すと気持ちがよい。大切な書類そのものの管理さえいい加減になっている。

・「決断」とは「決め」て「断つ」こと。もう一つの可能性を断ち切るには勇気が要るが、それが「覚悟」を生み「推進力」となる。まだまだ「ぬるい」。「心を燃やす」ためには「熱く」なれ。「ぬるい」ままでは火はいつまでもつかない。

・入試の最大の特徴は厳しい時間の制約にある。常に切り換えて短時間でも集中する。人の時間も大切にす。